



# 子どもの歯の矯正

子どもの歯の矯正治療は、歯並びやかみ合わせを治すだけでなく、成長を予測したうえで治療計画を立てることが大切です。大人とは異なることを理解して治療に臨みましょう。

取材に協力してくれた  
歯科医師のみなさん



星 隆夫 院長  
星 隆夫 歯科医師  
ほし たかお



どう 信夫 院長  
堂 信夫 歯科医師  
どう のぶお



いなげ 矯正 院長  
稲毛 滋自 歯科医師  
いなげ しげよ



## 1 1つから矯正治療を始めればいいのか

子どもの矯正治療は、時期や内容によつて「早期治療」と「本格治療」に分けられます。早期治療は、乳歯列期や乳歯と永久歯が交じり合った混合歯列期に、あごの成長を見ながらかみ合わせやあごの形、大きさなどを改善していく治療です。本格治療は、永久歯が生えそろい、あごの成長をある程度予測できるようになってから、矯正装置を使って歯を移動させていく治療です。このため、早期治療は一般的に10歳ごろまで、本格治療はそれ以降の子どもに実施されます。

「早期治療をしたら歯を抜かなくてすむ」

「早く治療すれば早く治る」

こう話します。

星歯科矯正院長の星隆夫歯科医師は、

「早期治療をする利点があるのは、早く治療をすることで、本格治療をしなくてすむ、抜歯をしなくてすむといった見通しが立っているときです。もしくは放置すると歯ぐきが下がる、あごの成長に影響が出るといった場合です」

「早く治療すればいいわけではない」

たとえば小学生になっても指しゃぶりをしていないと、出っ歯（上顎前突）や開

たほうがいいのかあるのです。

「早期治療をする利点があるのは、早く治療をすることで、本格治療をしなくてすむ、抜歯をしなくてすむといった見通しが立っているときです。もしくは放置すると歯ぐきが下がる、あごの成長に影響が出るといった場合です」

たとえば小学生になっても指しゃぶりをしていないと、出っ歯（上顎前突）や開



矯正治療は、通院したり、装置をつけたりと子どもの協力が不可欠(星歯科矯正で)

子どもの歯の矯正

咬(上下の歯をかんだとき、上下の前歯の間に隙間ができる状態)を引き起こすことがあります。これは指しゃぶりをやめるように指導して早期に治療すると治りやすく、本格治療をする必要がなくなることが少なくありません。放置すると、あごが本来とは違った形で成長してしまい、本格治療が必要になります。

また、乳歯がむし歯などによって通常よりも早く抜けた場合、あいた隙間に歯が寄ってきて歯並びがでこぼこ(叢生)になることがあります。こうした場合も、早期なら奥歯を後ろに引っ張ることで、歯を抜かなくても比較的簡単に歯並びがきれいになります。

しかし多くの叢生は、歯があごの大きさに対して大きく、無理に並ぼうとしたことで起きるものです。でこぼこの程度が大したものであれば、早期治療であ

この骨の成長を側方に促すことにより歯を抜かずに治療することもできますが、無理におさめようとして、口もとが前に出っ張ってしまうこともあります。その結果、本格治療で歯を抜かざるをえなくなることもあるのです。この場合は、すべて永久歯になるのを待って、本格治療をするのが適しているといえます。

下あごが前に出て、上下のかみ合わせが逆になっている受け口(下顎前突、反対咬合)も、早期治療をして一時的に改善しても、身長が急激に伸びる思春期に下あごも伸びることがあります。

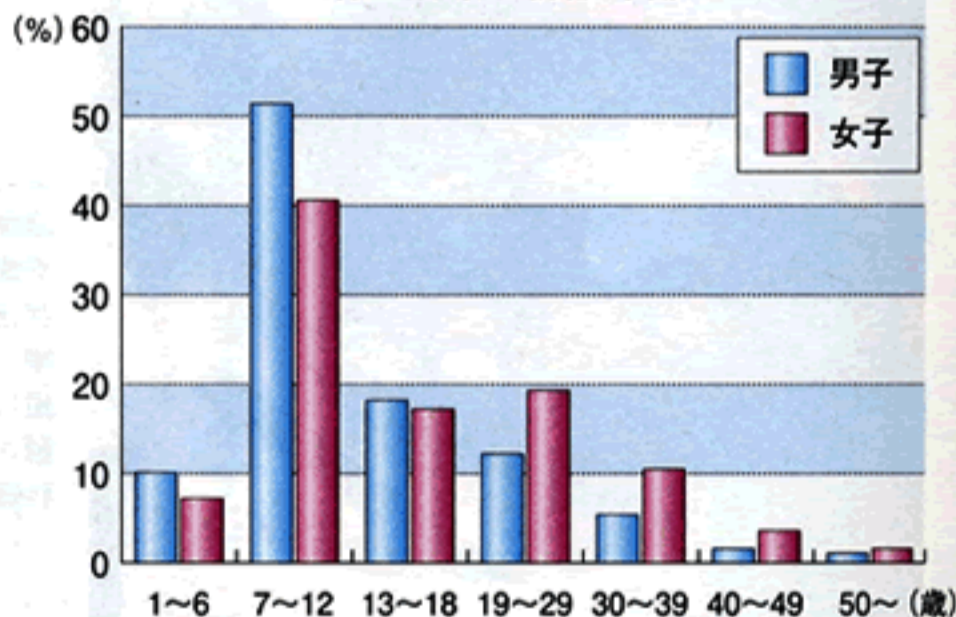
### 気になったときが最適な時期

どう矯正歯科院長の堂信夫歯科医師は、早期治療の意味について、こう話します。

「早期治療の目的は、不正咬合によって妨げられている成長や発育を正常な方向へと導くことです。無理にあごの骨を広げて歯を抜かないで治療することが目的ではありません」

早く治療すべきか、永久歯列になってから治療すべきかは、専門家でない判断がむずかしいところです。保護者が気にしている歯並びでも、永久歯が生

矯正治療の初診年齢



矯正治療の初診患者数は、男女ともに7~12歳がもっとも多い(日本臨床矯正歯科医会調べ)

えそろってきたら自然に改善することもあります。

実際に治療を開始するのは、7~8歳ごろが多いようですが、気になった時点で、かかりつけの小児歯科医師か、矯正治療を専門とする歯科医師に相談してみるといいでしょう。いなげ矯正歯科医院院長の稲毛滋自歯科医師は、こう話します。

「矯正治療は、患者さんの協力が不可欠です。嫌がる子どもにも無理に治療をしてもうまくいかず、途中で脱落してしまうケースもあります。矯正治療に手遅れということはないので、子どもの意思を尊重し、時期をずらすという選択をしたほうがいいこともあるのです」

## 2 子どもの歯はどうやって矯正治療するのか

永久歯列期になってからの本格治療は、ブラケットやワイヤといった装置を使って、歯を理想とする場所に動かしていきます。

一方、乳歯列期や混合歯列期の早期治療は、あごの成長を利用します。使用する装置や治療法は、歯並びやかみ合わせによって、それぞれ異なります。

たとえば下あごが出た受け口の場合、上あごの骨が前方へ大きく成長するように、装置で力を加えます。下あごの骨は、ほとんど成長を抑えることができないといわれているからです。

逆に上あごが前に出た出っ歯の場合、上の奥歯を後方へ移動させるほか、上あごの前方への発育を抑えるような装置を使用します。

また、上あごの歯列の幅が狭くて歯がきれいに並びきらず、でこぼこになっている場合は、上あごの骨を左右に数ミリずつ拡大することで歯を並べることがあります。下あごは1本の硬い骨なので広げることできませんが、上あごは左右の骨が中央で結合していて、子どものこ

ろは継ぎ目が固定していないため、左右に広げることができるのです。

指しゃぶりや舌癖が不正咬合（歯並びやかみ合わせが悪いこと）の原因になっている場合は、指しゃぶりをやめて、舌や唇を正しく動かすための口腔筋機能療法（MFT）といった訓練をすることも、早期治療の一つです。扁桃肥大や舌小帯（舌の裏側にあるすじ）の付着が原因になっている場合は、扁桃を切除する手術や舌小帯を切る手術が必要なこともあります。

早期治療は一般的に1〜2年で終わります。長期間に及ぶと、口の中に装置が入った状態が続くことで、本格治療に進む前に本人が疲れてしまう可能性があるのです。

### 治療計画を確認しよう

早期治療は、それだけですむこともあれば、すべて永久歯に生え替わってから本格治療をしたほうがいいこともありま

す。たとえば、出っ歯の早期治療で奥歯を後方に移動させて正しいかみ合わせになっても、前歯が前に傾いたままという場合もあります。この場合、永久歯になってから歯を移動させる治療をしなければ、きれいな歯並びにはなりません。

本格治療も必要になるかどうかは、矯正治療専門の歯科医師なら、事前に頭部や歯のX線写真（セファロ、パントモ）などをもとに歯やあごの特徴を分析することで、ある程度予測がつくものです。



混合歯列期の矯正治療は、あごの成長や歯が生え替わる状況に合わせて治療していく。数本の歯に装置をつけて動かすことも（星歯科矯正で）

矯正治療は自費診療なので経済的な負担が大きく、装置をつけるなど子どもに負

担をかけることになります。早期治療を効率的、かつ有意義なものにするために、

歯科医師には事前にしつかりと治療計画を確認しましょう。

### 3 子どもの「いい矯正歯科医」選びのコツとは？

あごの成長をコントロールしたり、歯を動かしたりする矯正治療は、むし歯や歯周病の治療とはまったく異なります。

実際に受診してみても判断することもできません。星隆夫歯科医師は、こう話します。「子どもの歯並びやかみ合わせの現状だけではなく、将来的にどうなるのかを説明してくれる歯科医師は信用できるで

線写真といった資料をそろえるのが基本です。こうした資料をそろえているかどうかも、目安になるでしょう。

#### 小児歯科医師が矯正をすることも

歯科医師選びが重要です。現在、矯正歯科には厚生労働省に広告標榜が認められた専門医制度はありませんが、日本矯正歯科学会、日本矯正歯科協会、日本成人矯正歯科学会が、それぞれ専門医を認定していますので、一つの基準となるでしょう（402ページからのリスト参照）。

明してくる歯科医師は信用できるでしょう。治療計画書といった形で文書があると、よりいいと思います。早く治療すれば歯を抜かなくてすむからと、治療をせかすような歯科医師には疑問を持つてください」

矯正治療を始める前には、顔面写真、

また、信頼できる矯正歯科医かどうか、

口腔内写真、口腔内模型、頭部や歯のX

#### いい「子どもの矯正歯科医院」7カ条

- ① 矯正の専門医および認定医が常勤している
- ② 治療前に顔面写真、口腔内写真、口腔内模型、頭部X線規格写真（セファロ）、歯のX線写真（パントモ）をそろえる
- ③ 治療開始前に治療終了までの総額を提示し、その後も見積もり以上の金額を請求しない
- ④ 希望すれば、セットアップ模型（治療後の歯並びやかみ合わせを予測して作る石膏模型）を作製してくれる
- ⑤ 将来的に歯並びやかみ合わせがどうなっていくのかを説明してくれる
- ⑥ 治療終了までの見通しを、「治療計画書」などで示してくれる
- ⑦ 「早く治療すれば歯を抜かなくてすむ」などと言って、治療をせかすことがない

矯正治療の専門的な技術を持っていればそのまま矯正治療をするでしょうし、そうでなければ、矯正治療専門の歯科医師を紹介してくれるはず。そのうえで、とりあえず治療するのではなく、ゴールを明確にし、最後まで責任を持って治療してくれる歯科医師かどうかを見極めて、任せるかどうかを判断しましょう。

ライター・中寺暁子